慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	魯迅『中国小説史略』素描
Sub Title	A brief sketch of Lu Xun, A Brief history of Chinese fiction
Author	植松, 公彦(Uematsu, Kimihiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2007
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.93, (2007. 12) ,p.48- 60
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00930001-0048

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

魯迅『中国小説史略』素描

植松　公彦

魯迅『中国小説史略』は「中国小説の発展過程を系統的に論述した中国文学研究史上初の専著」である。[1]

胡適は『白話文学史』（一九二八年）の自序において「小説の史料方面においては私自身も一定の貢献を果たしているが、最大の業績は当然魯迅氏の『中国小説史略』である」と述べている。[2]

その後鄭振鐸は『中国新文学大系』「文学論争集」（一九三五年）の序文において『中国小説史略』は「この時期最大の収穫の一つであり、中国小説研究の基礎を打ち立てた」と述べている。[3]

『中国小説史略』の存在は日本人にも早くから紹介され、例えば「魯迅氏の『中国小説史略』」という魯迅に対するインタビューを含む紹介記事（『北京週報』一九二三年一二月二三日号）や倉石武四郎が雅雲の筆名で書いた新刊紹介（『支那学』一九二六年七月号）がある。[4]

陳源が「致志摩」（志摩に致す）というエッセー（『晨報副刊』一九二六年一月三〇日）において『中国小説史略』は塩谷温『支那文学概論講話』（一九一九年）の剽窃だと公然と誹謗したが、魯迅がその論点に逐一反駁するという事件

もあった。[5]

とにかく総じて『中国小説史略』の学術的価値は出版以来今日に至るまで減じていないといってさしつかえなかろうが、それゆえかえって同書に対しては冷静な態度をもって接しなければならないと思う。

日中の魯迅研究者と中国小説研究者とによる『中国小説史略』に関する先行研究は大変精緻であり、それらを参照しつつ『中国小説史略』の小説史観に自ら慎重な検討を加えることは筆者の今後の研究の方向をおもんぱかるうえで決して無益ではあるまい。

また魯迅が『中国小説史略』の執筆に先行あるいは平行していかに膨大な史料を収集整理しえたのか、その道程に自ら詳細な検討を加えることは筆者の今後の研究の方法をおもんぱかるうえでやはり決して無益ではあるまい。

中国古典小説研究のありようを空間的な広がり、すなわち面として把握するにせよ、時間的な連なり、すなわち線として把握するにせよ、『中国小説史略』はその有力な視座の一つになりうる性格を今なお有するものと考えられよう。

ただし本稿は覚え書きとして『中国小説史略』に関するごくごく基本的な情報と表層的な理解を現時点で目睹しえた参考文献等に基づいて機械的に書き並べたに過ぎない。

参考文献に基づく記述についてはいちいち細かな出所を示さず、書名等を巻末に掲げるのみとして他の記述については必要に応じて文末に注を付した。

魯迅は北京大学の招聘を受けて一九二〇年八月一二月二四日より小説史を開講しており、その際の講義プリントが『中国小説史略』の前身である。

北京大学国文系主任の馬裕藻が当初小説史の開講を依頼したのは魯迅の弟の周作人であり、彼は一応は受諾したものの、準備不足を理由に結局兄の魯迅が彼に代わった。

魯迅は同時期に北京高等師範学校でも、一九二三年一〇月一三日からは北京女子高等師範学校でも、同年九月一七日からは北京世界語専門学校でも小説史を講義している。

『中国小説史略』が出版されるまでの間どの学校でもまったく同じものが使われていたのかは定かでないが、今伝わる講義プリントは二種類ある。

[一] 油印本『小説史大略』一七篇。公刊されているものには単演義編校（『中国現代文芸資料叢刊』第四輯所収、一九七九年。後に魯迅研究叢書の一冊『魯迅小説史大略』として陝西人民出版社より一九八一年に単行）と栄太之編校（『魯迅研究論叢』所収、吉林人民出版社、一九八〇年）とがある。最も新しくは劉雲峰篇『魯迅全集補遺』（天津人民出版社、二〇〇六年）にも収録されている。

[二] 鉛印本『中国小説史大略』二六篇。北京魯迅博物館所蔵の許寿裳旧蔵本が『魯迅研究資料』第一七輯（天津人民出版社、一九八六年）に収録されている。呂福堂「『中国小説史略』的版本演変」（『魯迅著作版本叢談』所収、書目文献出版社、一九八三年）によれば一九二一年下半期から一九二二年までの間に執筆されたという。最も新しくは世界名著百部の一冊『吶喊 朝華夕拾：中国小説史大略』（延辺人民出版社、一九九九年）に収録されている。

『中国小説史大略』は『小説史大略』より九篇多く、篇目から見て『中国小説史略』の骨格はこの時点でほぼ定まったようだが、『小説史大略』と『中国小説史略』との冒頭に見える篇目「史家対於小説之著録及論述」がかえって『中国小説史大略』にはない。

[三] 北京大学新潮社初版本『中国小説史略』上、一五篇、一九二三年。下、一三篇、一九二四年。計二八篇。『中国小説史大略』より二篇多いのは上述のとおり『小説史大略』第一篇が復活し、『中国小説史大略』第一五、一六篇「明之神魔小説」上下二篇が一篇増えて第一六～一八篇上中下三篇となったためである。同時におのおの修訂が施される。以降の版の部分的な修訂はこの版を基礎とする。

[四] 北京北新書局合訂再版本、一九二五年。「再版附識」が加わる。

[五] 上海北新書局修訂初版（すなわち第八版）本、一九三一年。比較的大幅な修訂が施される。

[六] 同修訂第一〇版本、一九三五年。魯迅と増田渉との書簡の往復を通じて修訂が施される。魯迅の生前に出版されたのは計一一版である。

[七]『魯迅全集[6]』第九巻本、一九三八年。[六] に基づく。修訂が施される。

[八]『魯迅全集[7]』第八巻本、一九五七年。[七] に基づく。

[九]『魯迅全集[8]』第九巻本、一九八一年。修訂が施される。初めて注が付される。

こうした一連の流れから見て我々が『中国小説史略』原文に接する際定本と見なしえたものは従来 [九] であったろう[9]が、二〇〇五年さらなる増補修訂の施された『魯迅全集』が出版されたことによって、この辺りの事情にも変化が生じよう。

[一〇]『魯迅全集[10]』第九巻本、二〇〇五年。

筆者が [九] と [一〇] とをあくまで大まかに比較したところ解題と注などに以下のような異同があることが取り敢えず分かった。

［一〇］において新たに加わった字句については傍点を付し（文章記号を除く。以下同じ）、同じく新たに改められた字句については傍点を付したうえでその直後に付した 〓 内に［九］における元の字句を示した。英数字は漢数字に改めた。文章記号については原文ママとした。

［解題］本書原為作者在北京大学授課時的講義，後経修訂増補，先後于一九二三年一二月、一九二四年六月由北京大学新潮社以《中国小説史略》為題分上下冊出版，一九二五年九月由北京北新書局合印一冊出版。一九三一年七月上海北新書局出修訂本初版，一九三五年六月第十版時又作了〔個別〕改訂。以後各版均与第十版同。作者生前共印行十一版次。

［序言］〔一〕外国人所作之中国文学史　最早有俄国王西里（B.П.Васильев）《中国文学史綱》（一八八〇年聖彼得堡出版）、日本末松謙澄《中国古文学略史》（一八八二年東京出版）、英国翟里斯（H.Giles）《中国文学史》（一九〇一年倫敦出版）、徳国葛魯貝（W.Grube）《中国文学史》（一九〇二年莱比錫出版）等。中国人所作者，二十世紀初有林伝甲《中国文学史》（一九〇四年編印〔出版〕）、〔謝無量《中国大文学史》（一九一八年出版）〕寶警凡《歴朝文学史》（一九〇六年出版）、黄人《中国文学史》（一九〇七年陸続出版）等，都不談或很少論及小説。一九一八年出版的謝無量《中国大文学史》〔林著排斥小説〕，〔謝著〕全書六十三章，祇〔僅〕有六〔四〕個章節論及小説。

［第六篇］〔八〕《衛風》応作《鄘風》。

［第一一編］〔五〕《劍侠伝》明人桃源居士輯編的《唐人説薈》中有題為段成式撰的《劍侠伝》共十二篇。其中除《蘭陵老人》、《盧生》等四篇原出段成式《酉陽雑俎》外，其他均非段成式的作品。

［第一七編］〔一二〕現存明刊金陵世德堂本《西遊記》，無第九回之玄奘出生、父母偶難事。較早略見于明朱鼎臣《西遊釈厄伝》。清初汪象旭自称従古本得之，増補挿入呉承恩百回本中，即《西遊記》評本《西遊証道書》。

また巻頭一枚目の写真が［九］では「北京西三条寓所外景」であったのが［一〇］では「在西安講学時合影（一九二四）」に差し替えられている。

今回は時間がなく、［九］と［一〇］との間にさらなる異同が存在するかどうか確認することができなかったが、我々が今後『中国小説史略』原文に接する際［九］に替えて［一〇］を現時点における定本と見なしうるか否か詳しく比較検討しなければなるまい。[11]

このほか二〇〇五年版『魯迅全集』では［四］に加わった「再版附識」は第八巻に、増田訳（参考文献参照）に加わった「日本訳本序」は第六巻に収録されており、現存する魯迅の増田宛の書簡や翻訳に際して増田と魯迅との間で取り交わされた質疑応答の書簡[12]は「関与『中国小説史略』」として第一四巻に収録されている。

中国では二〇〇五年版『魯迅全集』の増補修訂の正否を問う論文がすでに多く発表されているが、本稿執筆時の二〇〇七年九月三〇日現在『中国小説史略』のそれに関するものは管見では発表されていないようである。

なお一九二四年七月に国立西北大学と陝西省教育庁とが西安で共催した夏期学校における魯迅の講演記録『中国小説的歴史的変遷』[13]は『中国小説史略』のダイジェストとでもいうべきものだが、両者の間には考察や話柄に異なる点があり、併せて参照すべきである。

『中国小説史略』に結実する魯迅による膨大な史料の収集整理は主に『古小説鉤沈』、『唐宋伝奇集』、『小説旧聞鈔』の三書にまとめられたが、こうした一連の作業は『中国小説史略』の執筆に先行あるいは平行する形で行われた。

『古小説鉤沈』五巻、後不分巻。一九〇九年秋から一九一一年末にかけて編纂された古小説逸文集であり、周から隋までの散逸した古小説三六種を収集整理した。魯迅の死後一九三八年版『魯迅全集』第八巻に収録された。『中国小説史略』の第一～七篇に相当する。「序」が二〇〇五年版『魯迅全集』第一〇巻に収録されている。

『唐宋伝奇集』八巻。宋の『文苑英華』、『太平広記』、『青瑣高議』などの類書に基づき版本価値と後代に影響のある唐宋の単行文言小説四五篇を収集整理した。巻末に作者と作品とを考証論評した「稗辺小綴」一巻を付す。上海北新書局より一九二七年に上冊が、一九二八年に下冊がおのおの出版された。『中国小説史略』の第八～一一篇に相当する。「序例」と「稗辺小綴」とが二〇〇五年版『魯迅全集』第一〇巻に収録されている。

『小説旧聞鈔』不分巻。旧小説三八種に関する史料三五篇、小説史に関する史料四篇、計三九篇からなる。北京北新書局より一九二六年に初版が出版され、一九三五年に魯迅により増訂された。『中国小説史略』第一二～二八篇に相当する。「序言」と「再版序言」とが二〇〇五年版『魯迅全集』第一〇巻に収録されている。

これら三書の内容を鳥瞰しただけでも魯迅が基本的には独力で積み重ねたという作業はめまいを覚えるほどの分量だ

が、もし彼の中国古典小説研究の全容を把握したければ、その他の著書中に散在する中国古典小説への言及をも通観する必要は当然あるだろう。

二〇〇五年版『魯迅全集』「出版説明」には

このほか作者の翻訳した外国の作品、校勘収集した中国の文学、歴史の古籍及び初期に顧琅と共編した『中国砿産志』と生理学講義の『人生象敎』などは、それぞれ『魯迅訳文集』一〇巻、『魯迅輯録古籍叢編』四巻と『魯迅自然科学論著』一巻に編纂して別途出版した[14]

とあり、これらの選集と同『全集』を受けて出版された前出の『魯迅全集補遺』とを併せれば、さらに容易かつ幅広く魯迅の著書に触れることができるようになっている[15]。

とりわけ『魯迅輯録古籍叢編』は第二巻に『古小説鉤沈』と『小説備校』とを、第四巻に『唐宋伝奇集』と『小説旧聞鈔』とを、上述のとおり『魯迅全集補遺』は『小説史大略』を収録しており、魯迅の中国古典小説に関する基礎研究の主要な部分を一望するのに便利だろう。

『中国小説史略』「序言」において魯迅は

中国の小説には従来歴史がなかった。それがあるとすれば、まず外国人の著した中国文学史の中に見え、後には中

国人の著したものの中にもあるけれども、その量はいずれも一書の十分の一に満たず、ゆえに小説についてはなおつまびらかでない。

と述べたとおり、同書以前に中国には小説史というものが存在しなかった。

この「序文」に対して二〇〇五年版『魯迅全集』の付した注には「外国人の著した中国文学史」として西洋についてはロシアのサンクトペテルブルグで一八八〇年に出版されたワシーリの『中国文学史綱』、イギリスのロンドンで一九〇一年に出版されたジャイルズの『中国文学史』、ドイツのライプチヒで一九〇二年に出版されたグルーベの『中国文学史』が挙げられている。[16]

同じく日本については東京で一八八二年に出版された末松謙澄の『支那古文学略史』が挙げられているが、魯迅は一九〇二～〇九年にかけて日本に留学していたから、同書と同時期に出版されていた以下の諸本にも目を通していたかもしれない。

古城貞吉『支那文学史』（経済雑誌社、一八九七年）
笹川種郎『支那文学史』（博文館、一八九八年）
中根淑『支那文学史要』（金港堂、一九〇〇年）
高瀬武次郎『支那文学史』（哲学館、一九〇一年）
久保得二『支那文学史』（人文社、一九〇三年）

小説史には笹川種郎『支那小説戯曲小史』（東華堂、一八九七年）があり、これは魯迅が『中国小説史略』の執筆に

際して参考にした塩谷温の『支那文学概論講話』の小説部分にも大きな影響を与えたが、「序文」の記述が正確だとすれば、魯迅はこれには目を通していなかったかもしれない。

日本人の手になる中国文学史が中国人に先鞭を付けたのは事実であり、その後それらに影響を受けていよいよ中国でも文学史が陸続と編まれるようになっていく。

一九〇四年に林伝甲の『中国文学史』が出版されて北京大学の前身である京師大学堂の教科書として使われたのを皮切りに、一九〇六年には竇警凡の『歴朝文学史』が、一九〇七年には東呉大学教授の黄人がやはり教科書として著した『中国文学史』が[17]、一九一四年には王夢曾が中学用の教科書と銘打った『中国文学史』が、一九一五年には曾毅の『中国文学史』が、一九一八年には謝無量の『中国大文学史』が出版された。

『中国小説史略』を読み解くには文学史の本来的な性格や上述の事実から導き出される当時の中国における文学史の受容と展開を踏まえておく必要があるだろう。

冒頭で述べたとおり本稿は覚書として『中国小説史略』に関するごくごく基本的な情報と表層的な理解を現時点で目睹しえた参考文献に基づいて機械的に書き並べたに過ぎないが、今後は本稿をたたき台として引き続き同書の先行研究を精査していきたい。

『中国小説史略』を専題とする論文は多く、魯迅の中国古典小説研究に論究したものは枚挙にいとまがないし、現時点で入手しえたものについても内容を一々詳しく理解していないので、取り敢えず以下に同書に関する専著を幾つか掲げる。

単演義編校『魯迅小説史大略』（魯迅研究叢書、陝西人民出版社、一九八一年、前出）

儲大泓『読「中国小説史略」札記』（上海文芸出版社、一九八一年）
許懐中『魯迅与中国古典小説』（魯迅研究叢書、陝西人民出版社、一九八二）
趙景深『「中国小説史略」旁証』（魯迅研究叢書、陝西人民出版社、一九八七年）
周錫山釈評『中国小説史略（釈評本）』（上海文化出版社、二〇〇五年）

日本には専著がないが、参考文献に掲げた諸日本語訳は訳文、訳注のみならず解説も非常に充実しており、その価値は質的にも量的にも内外を問わず『中国小説史略』研究の目下の最高水準を示すといってよかろう。

困難を承知でいえば、将来的には魯迅の中国古典小説研究を媒介として精査の手を彼とほぼ同時代を生きた研究者たちの業績にも伸ばし、そこで得た知見から後代の中国古典小説研究の姿を照射することによって新たな問題提起をすることができればいいと思う。

参考文献

増田渉訳『支那小説史』上（岩波文庫、一九一六年）、下（岩波文庫、一九一七年）
今村与志雄訳『中国小説史略』（『魯迅全集』第一一巻所収、学習研究社、一九八六年）
中島長文訳注『中国小説史略』一、二（東洋文庫、一九九七年）

注

1　陳正宏、章培恒主編『中国学術名著提要』文学巻（復旦大学出版社、一九九九年）八〇九頁。

2　注1前掲書八一一～八一二頁。

3 注1前掲書八一二頁。

4 藤井省三『魯迅事典』（三省堂、二〇〇二年）二〇二頁。

5 注4前掲書二〇一～二〇二頁。

6 魯迅先生紀念委員会編、二〇巻。魯迅全集出版社、一九三八年。『魯迅全集』の最も早い版で著作、翻訳、魯迅の収集記録した古籍の一部を収録（以下注における『魯迅全集』に関する記述は主に二〇〇五年版同『全集』出版説明による。以下同じ）。

7 人民文学出版社編、一〇巻。一九五六～五八年。創作、評論、文学史専著、書簡の一部を含む著作のみを収録。部分的に注を付す。

8 人民文学出版社増補修訂、一六巻。一九八一年。一九五六～五八年版一〇巻本を基礎とする。『集外集拾遺補編』、『古籍序跋集』、『訳文序跋集』、日記、当時収集しえた書簡のすべてを新たに収録。全面的に注を付す。作者著訳年表、『全集』篇目索引、注釈索引を収録した附集一巻を含む。収録内容と詳細を極めて学術的価値の高い注により従来評価が高く、日本で一九八四～八六年に学習研究社から出版された『魯迅全集』二〇巻はこれの完訳である。

9 参考文献に掲げた日本語訳『中国小説史略』三種のうち増田訳は［六］を、今村訳と中島訳とは［九］を各々底本としている（注8参照）。増田訳は一九六二年に岩波文庫として改訳『中国小説史』上冊が出版されたが、訳者の死去により訳業は中断した。今村訳は一九九七年にちくま学芸文庫として改訳上下二冊が出版されたが、底本は［七］で［九］の注の訳がない。中島は一九八七年一〇月以来『神戸外大論叢』に「中国小説史略考証」を執筆している。ちなみに初めての日本語訳は一九二四年一月一三日から一一月一六日にかけて『北京週報』に連載された訳者不明の初版本の抄訳である。楊謙益、戴乃迭による英訳『A Brief History of Chinese Fiction』（外文出版社、一九五九年）もある。

10 『魯迅全集』修訂編輯委員会増補修訂、一八巻。人民文学出版社、二〇〇五年。一九八一年版一六巻本を基礎とする。魯迅生前の定稿によって校勘し、既存の注を増補修訂。これまで収集しえかつ鑑定を経た新発見の文章と書簡、『両地書』の魯迅の書簡原文、『答増田渉問信件集録』を新たに収録。「紀念魯迅逝世七十周年　編年体魯迅全集将出版」（『北京娯楽信報』二〇〇六年一〇月二〇日）によれば二〇〇七年には編年体の魯迅全集を含む新たな魯迅研究書が幾種か出版される予定だという。

11 『魯迅全集』編纂作業が出版以来しばしばその時々の政治情勢の影響を蒙ってきたことについては張小鼎「『魯迅全集』四大版本編印紀程」（『新文学史料』二〇〇六年第四期所収）が事細かいようである。注2前掲書二六六～二六七頁にも「九」の後に持ち上がった出版構想が党中央機関の介入によって頓挫したという事件が紹介されている。

12 『答増田渉問信件集録』は伊藤漱平、中島利郎共編『魯迅増田渉師弟答問集』（一九八六年、汲古書院）に基づいて編集された（注10及び同『集録』説明参照）。

13 『中国小説の歴史的変遷』として今村訳が学習研究社版『魯迅全集』第一一巻に収録されているほか、同じく丸尾常喜訳注が一九八七年に凱風社から出版されている。

14 『魯迅訳文集』一〇巻は一九五八年に、『魯迅輯録古籍叢編』四巻は一九九九年におのおの人民文学出版社から出版されているが、『魯迅自然科学論著』については不明。未刊か。

15 『中国砿産志』と『人生象教』とは『地質学残稿』などと併せて前掲の『魯迅全集補遺』に収録されている。一九八一年版一六巻本には収録されたが二〇〇五年版一八巻本では除外された『生理実験述要略』も同書に収録されていることから推察するに『魯迅自然科学論著』一巻の編纂は今のところ見送られているのかもしれない（注10参照）。張小鼎注11前掲論文によれば『生理実験述要略』は『中国砿産志』、『人生象教』、『地質学残稿』などの科学関連の著述とまとめて『魯迅科学論著』として出版する予定であり、書名は暫定的なものだという。ここでいう『魯迅科学論著』は『魯迅自然科学論著』と同一のものを指すのかもしれない。

16 管見では三書とも中国語訳、日本語訳は公刊されていないようである。ちなみにジャイルズの中国で出版された著書にはウェーリーとの共訳『英訳中国歌詩選』（商務印書館、一九三五年）があり、日本語訳されているものには森沢三郎訳『支那文化展望』（大阪宝文館、一九四三年）、小野久三訳『支那文明史話』（日本出版社、一九四四年）がある。

17 曹培根「黄人及其『中国文学史』」（『常熟理工学院学報（哲学社会科学版）』二〇〇七年第一期所収）によれば黄人は『中国文学史』を一九〇四年に書き始めて一九〇七年に初稿が完成し、重要な章節については一九〇七年の『東呉学報』第一一期と『学桴』第二年第一期とに連載されたという。